

2021. 8. 29. 主日礼拝説教  
聖書：ローマの信徒への手紙 13章 8-10 節  
『愛すること以外に借りをつくるな』

「友愛と真実が、あなたを見捨てないように、それらをあなたの首に結びつけておきなさい。それらをあなたの心の板に書き記しなさい。」とは、旧約聖書の箴言 3 章 3 節の言葉です。この「友愛と真実」(新共同訳では「慈しみとまこと」と)とは、二つのことを意味しているのではなく、ひとつの事柄を類似した二つの語で表現しているのです。それはここでいう「愛」というものが単なる偶然や一過性のものでは決してなく、しっかりとした基盤を持っていることを表現しています。人がこのような愛をもし軽んじるなら、愛があなたを見捨てるでしょう。ですから、この愛を大切に身に付け、あなたの心に刻み込んでおきなさいと旧約の賢者は語りました。

現代はカードのみならずケータイさえあれば、現金を持たなくとも気軽に日常の買い物ができる時代です。しかし、クレジット(信用)で買おうと、ローン(借金)で買おうと、やはり借りには変わりなく、後でお金を払わなければなりません。この買うという行為は古代には「交う」と書きました。つまり物々交換という大昔の経済行為と基本的には何ら変わることがないのです。だから、何かを得たら代価を払う義務が生じてくるわけです。けれども最近では、この借金を返すという行為を義務として考えないで、軽く考えるというかなんとかなるという風潮が蔓延しているようで、返済不能になってトラブルを起こすことが個人だけでなく、組織や国家にまで至っています。

募金活動をしている知人が「私が募金活動をしているということは、私が借金をしているのと同じなのです。後日、その人が募金するときに私は少なくとも同額をしなければならない。」と言われました。お金だけではなく、誰かに何かをしてもらうということは、その人に借りを作っていることなのだという考えです。このような貸借関係でうごくのが日本社会の文化なのでしょう。つまり、貸借関係でない愛こそ本物の愛だということになります。

しかし、聖書には義務を果たす、つまり借りを返すということが律法の基本理

念として存在するのです。ハムラビ法典のように、目には目・歯には歯・命には命の償いをしなければ借りが残ってしまうということなのです。罪だってスイマセンと言ってすみものではないし、全ての物や行為は同じ代価を払ってこそ初めて精算されると考えられています。

それ故に、主イエスは私たちの罪を消すために十字架に架かって死ななければならなかったのです。預言者イザヤも救い主が病を負うということを預言しましたが、主イエスが負って下さることでわたしたちの負い目(罪)が帳消しにされたのです。そのように徹底した貸借関係の社会で、愛とは優しさやウヤマヤさの代弁ではなく、借りを返して貸借をなくしてすべき事をした上で、相手のために善いことをなすべきだと聖書は語るのです。

「互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがあってはなりません」とパウロは記します。甘えて生きやすい私たちが、相手のために愛に生きるように、まずすべき事をした上で、まだ愛に欠けているんだと「借り」を感じるようになりたいものです。

旧約の時代は罪が永遠の借りでした。しかし、主イエスの十字架によって事柄は一変したのです。愛こそが「永遠の借り」なのです。